

---

# 愛の美奈子ものがたり

九里エイタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛の美奈子ものがたり

### 【Nコード】

N18440

### 【作者名】

九里エイタ

### 【あらすじ】

セーラースターズ終了1年くらい（みんな高校3年生）からのお話です。

主人公は美奈子ちゃんです。

キンモク星に帰った3人が現れて・・・

## ？星たちの再会（前書き）

大好きなセーラーームーンの小説を書いてしまいました。

趣味まるだしです、夜天くんと美奈子ちゃん（& a m p ・星野とうさぎちゃん& a m p ・大気さんと亜美ちゃん）・・・の恋のお話です。

よろしく願います。

## ？星たちの再会

わたし、愛野美奈子。花も恥らう17歳よ。

あの悪夢のようなギャラクシアの襲来から約1年。 。  
うさぎちゃんたちは相変わらずで、とても平和な毎日を過ごしているわ。

私かというと、みんなの応援もあって、今は花のアイドル街道まっしぐらなの。

学校とアイドルの両立は大変で、ときどき負けちゃいそうになることもあるけど・・・そんなときにはいつもあの3人のことを思い出すの。

スリーライツの3人のことよ。

彗星の如く現れ去っていったカリスマアイドル・スリーライツは、今もみんなの間で語り継がれているの。

そういえば、あの3人は今ごろ・・・どうしているのかしら？

あれからすぐにキンモク星に帰っていったきり、何の連絡もないんだもの。ちよつと心配。

夜天くん・・・今ごろどうしているのかな？

・・・って。

え、あつ、夜天くんだけじゃないのよ。

星野くんに大気さんに、火球プリンセス・・・みんな元気してるかな？

【愛の美奈子ものがたり】

act1・再開<前編>

「はあ・・・」  
そんなことを考えていたら、つい溜息をついてしまった。  
あー、いけないイケナイ。

幸せを一つ、逃がしちゃうところだったわ。  
今日は始業式。

校庭の桜がハラハラと舞っていて、とつてもキレイ・・・。  
それはまるで、夜空に輝く幾千もの星たちのようで。  
美奈子はキンモク星へと帰っていった3人のことをさらに一層強く  
思った。

私も今日から高校3年生かあ・・・。  
去年はホント、嵐のように過ぎていったわ。  
華々しいアイドルデビューを飾った、昨年4月。  
あれからもう、1年になるのね。

「みーなーこーちゃんっ！」  
突然後ろから声をかけられ、抱きつかれた。

・・・もっつ、せつかくセンチに浸ってるどころだったのに。  
うさぎちゃんっいたらしょうがないんだから・・・。  
そう言いつつも、思わず美奈子は笑顔になってしまっつ。  
そして、すぐにうさぎに向きなおす。

「うさぎちゃんっ！んもっつ！びっくりさせないでよっ」  
美奈子はさっきまでとはうってかわって、いつもの明るい調子で言  
った。

そうよ。これがアタシよ。  
おセンチなんて似合わない。元気で可愛い美奈子ちゃんっ！  
・・・って自分で言うのもどうかとも思っつけど。  
可愛いから許してっ！なんてネ。

「美奈子ちゃん、どうしたんだい？何か考え事かい？」

まことが心配そうに言う。

さすがまこちゃん、分かってくれてる・・・っ！

ふと、まことがいつも付けている薔薇のピアスが目に入る。

そういえば、夜天くんの薔薇って、黄色だったわよね・・・。いつも胸にさしていた、私の髪と同じ黄色。

・・・あ、それならうさぎちゃんも同じじゃないっ！

けどうさぎちゃんには、衛さんもセイヤくんもいるしっ！・・・っ  
て、ああもう私何言ってるんだろ。

「もしかしてお勉強の悩み？私でよければ相談に乗るわ」

亜美は心配そうに美奈子の顔を覗きこむ。

ああ・・・私の周りにはどうしてこういいお友達しかいないのかしら。

亜美ちゃんも、こんなにも私のこと心配して・・・って。

あ、心配なのは私自身というよりむしろ私の頭なのかしら・・・。  
うう〜ん。

「亜美ちゃん・・・」

くっ・・・悪気がないところがまた、傷つくわあ・・・。

美奈子はホロリと涙をこぼしてみせる。

「そんなのいつものことだよねえ〜」

「うさぎちゃんっ！」

美奈子は鬼のように怒った。

・・・けど、みんなといるのって、やっぱりすっごく楽しいわ。

アイドルのお仕事にも、負けないくらい。

だから・・・もつとみんなと一緒にいたい。

「ごめんごめんっ！」

うさぎは舌をだして、えへへと笑った。

もつともつとみんなと笑いあいたいの。

ガッコは違うけどもちろん、レイちゃんもね。

これって、ワガママなのかな。。。

「そういえばサ」

まことが話の流れを変えるように切り出した。

「新しいクラスの発表、もう見た？」

「あつ、まだ見てない・・・」

そうじゃないっ！何をやっているんだろ、私っ！

この、情報通と呼ばれる愛野美奈子がそんな重要な情報をまだ入手していないだなんてっ！！

愛野美奈子、新学期早々不覚だわ・・・。

けどっ！今は落ち込んでいるヒマなんてないのよっ！

美奈子は早くクラス分け発表を見に行きたくて、目に炎をメラメラと燃やした。

「じゃあ今からみんなで見に行こうよ！」

うさぎが提案した。

うさぎちゃん、ナイス！

美奈子は心の中でうさぎにVサインを送った。

「そうね、行きましょう」

亜美はうなずいた。

「美奈子ちゃんも、早く見に行きたくてすごくうずうずしているみたいだしね」

まことはバッチリとウィンクを美奈子に投げた。

やっぱり、お友達って素敵だわ。

美奈子は改めてそう実感した。

「今年こそっ！みんな同じクラスでありますように・・・」  
歩きながら、美奈子は手を合わせて祈った。

「さすがにみんな同じは無理だろうケド・・・」

「みんな同じじゃなきゃダメなのよっ！みんなで過ごす時間が、少しでも多い方がいいもの・・・」

そうよ。私は学校もアイドルのお仕事も両立させるわ。

・・・だけど、やっぱりお仕事が多い日ともなると、学校を休まなくちゃいけない日だってある・・・。

だから、学校に来られる日はみんなで一緒に過ごしたい。今しかできないことってあると思うの。

お仕事だつてそう。高校生活だつてそう。

両方エンジョイしたいもの。

だったら、みんな同じクラスがいいじゃない？

・・・なんて。こんなハズカシイこと言えないケド。

きつとみんな分かってくれているからいいの。

「美奈子ちゃん・・・」

みんなにはその思いが通じたのか、ただ美奈子を見つめる。

「大丈夫、きつとみんな同じクラスよ」

亜美が元気付けるように言った。

もう、ホント今日はダメね。

みんなに元気をあげるはずのアイドルである私が、逆にみんなに元気をもらつてちゃ。

それもこれも・・・うん、そうよ。

全部、ぜーっんぶ、夜天君のせいなんだから。

もうっ！今度会ったら、うんと追っかけまわしてやるっ！

美奈子は胸の中でクスリと笑った。

「そうよねっ！さあ〜！みんな、早く早くう〜！早くしないと、置いてっちゃうわよっ！」

そう言つて、美奈子は全速力で駆け出す。

「あつ、待つてよ美奈子ちゃんっ！！」

うさぎは美奈子をすぐさま追いかけた。

\*\*\*\*\*



「やたあーっ！みんなーっ！同じクラスよおおーっ！！！」

新しいクラス分けの掲示をみて、美奈子は歓喜した。

「うっそお！？」

「ええ〜っっ！？」

「そんなことって、あるのかしら・・・」

うさぎ、まこと、亜美も驚きを隠せない様子だ。

「それがあるのよ、ここにっ！もあーっみんな遅いんだからあ〜！ほらほら早くう〜！」

美奈子はそんな3人を早く早くと急かした。

「美奈子ちゃんったら、いつもながらパワフル過ぎるよ・・・」  
「やれやれと言った風にまことは美奈子を追った。」

「今朝だつて、一緒に寝坊しそうになつたつていうのにね・・・あつっもつだめえっ！」

うさぎはそう言つと床にへたり込んだ。

「もつ、うさぎちゃんたら・・・」

亜美は苦笑した。

\*\*\*\*\*

「ホントだ・・・」

「4人全員同じクラスだなんて・・・すごいわ」

まことと亜美はまじまじとクラス分けの掲示を見ている。

「やったね！美奈子ちゃんっ！」

「うさぎちゃんっ!」

うさぎは美奈子は手を取り合い、そしてひしつと抱き合った。本当にほんとに、ホントなのねっ!?

美奈子は喜びをうさぎと分かち合った。

どうしょ・・・泣いちゃいそうなくらい、嬉しい。

「美奈子ちゃん、いつでもお勉強聞きにきてね。お仕事の方も、これからもっともっと忙しくなると思うし」

そこに間髪入れず亜美が言った。

「うっ・・・お仕事が忙しくなるのは嬉しいけど・・・お勉強はイヤっっ!!」

そんなの、別の意味で泣いちゃいそうよーっっ!!

美奈子は心の中で叫んだ。

「私もよ、美奈子ちゃん・・・っっ!」

「うさぎちゃんっっ!!」

うさぎがまた、美奈子と分かち合った。

「オイオイ・・・」

そんな2人を、まことがやれやれといった感じに2人を見つめた。

キーンコーンカーンコーン・・・

「あ、チャイムだ」

「みんな、早く席に着きましょう」

亜美がそう言うのと、みんなそれぞれの席を探しだす。

「えーっと、私の席は〜と・・・」

「ああ・・・みんなで同じクラス・・・素敵だわ」

美奈子はくつと幸せをかみ締め、新しい教室へと足を踏み入れた。なんだか、イイコトがいっぱいありそうな予感・・・

「あっ!うさぎちゃん、席、前後ろじゃない?」

美奈子はあつと声をあげ驚いた。

「本当だ〜っ！美奈子ちゃん・・・っ！授業中は、寝かせてね」

「それは私の台詞よ、うさぎちゃん」

2人で手を取り合って、ふふふと笑った。

・・・けどどっ！今年は授業の方だつて、ちゃあーんと頑張っちゃうんだからっ！！

美奈子は心に決めていた。

高校生活最後の1年だもの。

昨年と一緒ではいられないわっ！！・・・うさぎちゃんにはナイショだけどね。

「アレ？どしてここの席空いてんだろ？あつちの2つも・・・」  
うさぎは美奈子の横の席を指差した。

「あ、ホントだ。まあいいじゃ〜んっ！こうしてみんな同じクラスになれたことだしサっ！

しかもうさぎちゃんとは席が前後ろっ！ああ〜美奈子うれしいっけれどそんなことは今の美奈子には全く関係のないことだった。

どうせ寝坊かなんかデシヨ。

始業式の日から寝坊つていうのも、どうかとは思っけど。

私も今朝しかけたけど・・・；一応、間に合ったことだしっ！

それとも風邪でもひいてるのかしらね？

美奈子はそんな風にぼんやりと隣の席を見つめた。

まあ、3人つていうのは気になるところではあるけれど。

ガラガラと教室のドアを開けて先生が入ってきた。

「よーし、みんな席に着いたか〜？あー、突然だが、転校生を紹介する」

先生が言った。

え？今なんて？・・・転校生？？

美奈子は目をぱちぱちさせた。

突然だがって先生、突然すぎるにも程があるわよっ!!

「転校生だつて。こんな始業式の日にどうしてまた」  
うさぎが美奈子の方に振り向いて言った。

突然すぎるわ、けどけどすっごくドキドキする。

「どんなコかしら〜? カッコイイ男の子だといいわ、ねっ! うさぎちゃんっ!」

ああっ!! やっぱり学校つていいわ・・・転校生、いい響きよねえ。  
美奈子は目を輝かせた。

クラス中の視線が先生へと集中する。

「突然すぎたため、クラス発表の掲示にも名前はなかったが・・・  
えー転校生は3人だ。・・・君たち、中へ」

先生はそんなみんなの熱い視線の中、ゆっくりと話を進めていく。  
もうっ! 先生つたらじらさないで〜っ!!

美奈子は“待て”をされている犬のような気分だった。

先生が扉の向こうへ声をかけ、クラスの視線は扉の方へと移り・・・  
そして・・・

「あっ! 入ってきたっ!!

「どれどれえ〜っ!?

「きゃーっ!!

クラス中が口々に様々なことを言い出す。

けれどそのほとんどは美奈子の耳には全く届かなかった。

美奈子の全神経は、今、目だけに集中されていたからだ。

「え・・・っ」

美奈子は口をぽかんと開けた。

どうして!?

見間違い!?

ううん、見間違えるわけがないわ。  
だって、だって、だってだってっ！！  
そこに居たのは・・・

「夜天くん!？」

美奈子はあまりの驚きに、思わず席を立ち上がった。

「星野あ!？」

「大気さんっ!？」

「どうして3人が!？」

うさぎも亜美もまことも驚きを隠せなかった。

「それでは、左から順に自己紹介を」

先生が3人に言った。

「星野光です。また戻って来ちゃいました。ってことで、みんなよろしくなっ!」

「大気光です。こうしてまたみなさんにお会いできて嬉しいです。よろしくお願いします」

「夜天光です。・・・よろしく」

星野、大気、夜天は相変わらずな様子で自己紹介をした。

美奈子はまだこの状況を飲み込めなくて何度も何度も3人を見た。

「・・・スリーライトが・・・スリーライトの3人が・・・スターライトの3人がいる・・・」

うそ、夢じゃないわよね？

美奈子は思い切り自分の頬をつねってみた。

い、イタイっっ!!

夢じゃないっ!夢じゃないのねっ!!

本物なのね、あの3人はっ!

今朝寝坊したまま見ている夢とかじゃないわよねっ!?  
けど・・・どうして!?

「なんでセイヤが!？」

うさぎは立ち上がって星野に駆け寄り、言った。  
目には涙をうかべている。

そりゃそうよね、キンモク星に帰った3人から連絡が来ないって一番心配していたのはきつと、うさぎちゃんだったんだもの。  
良かったね、うさぎちゃん……。

美奈子はうさぎの背中を優しい目でそつと見つめた。

「ひっさしぶりだな、おだんごっ！俺にまた会えて嬉しいのは分かるけど、今は落ち着けて。話なら後で、な？」  
つか、泣き虫なの変わんねーのなっ！」

星野は口の端を上げてニヤリと笑い、うさぎの頭をぐりぐりと撫でた。

とても嬉しそうな表情をしている。

星野くんもすっごく嬉しいんだ。

それにやっぱり今も、うさぎちゃんのことを好きなのね。

美奈子は胸の中で呟いた。

「うっ……／＼／＼ほつといてよっ！」

うさぎは拗ねてふんつとそっぽを向いた。

星野は苦笑してうさぎを見つめる。

けれどその表情は、次第に真剣なものへと変わっていった。

「あのさ、おだんご……」

「みんな静かにーっっ！えー、3人の席は」

星野が何か言いかけたところに、先生が大声で遮った。

「先生ここ、ここ空いてます！！夜天くんっ！」

美奈子が手を挙げ大声で言った。

「……だそうだ。じゃあ夜天の席ははあそこだな」

先生はその迫力に圧倒されつつ、美奈子の隣の席を指差した。

「ええっ！ちえっ……何で僕が」

夜天はしぶしぶ美奈子のとなりの席に着いた。

「またよろしくね、夜天くんっ！」

美奈子はそんな夜天もお構い無しのいつもの明るい調子で言った。  
あたり一面に花が咲いたかの様な笑顔で。

「……」

「ねえ、夜天くん」

「……なに？話なら後にしてよ。さつきセイヤも言ってただろ」

夜天は頬杖をついて面倒くさそうに美奈子の方を向いて言った。

「もおく相変わらずつれないんだから」

美奈子は頬をぷーっと膨らまして言った。

「……ホントに、君も相変わらずだね」

夜天は溜息をつくかのような言い方で言った。

けれどその声音とは違い、表情は穏やかなもので……。

あつ！夜天くん笑った！？

「……じゃあ、後でちゃんと説明してよ？約束っ！」

今の笑顔……急にそんな顔向けられたら……ドキツとするじゃない。

美奈子は高鳴る胸を押さえ、うつむいた。

夜天くんたら、いつもみたいなアンニュイな表情じゃなくて、アイドルの笑顔でもなくて……。

「……ハイハイ」

あ、今度はまたアンニュイだ。

……ってああもう、何言ってるんだか、私ったらっ！

美奈子は両手でビシツと赤く染まった頬を叩いた。

夜天くんと一緒にいると、ホント、心臓がいくつあっても足りないわ……。

あれ？心臓がいくつもあつたらもっとドキドキしちゃうかも……？

あああ、もう何がなんだか分からなくなってきた……。

美奈子は夜天の横顔を見つめた。

夜天くん……横顔すごくキレイ……。

女の私でも嫉妬しちゃうくらいなんだもの。  
それにこんなにドキドキしちゃう。

いつからだったかな、夜天くんのコト気になり始めたのは……。  
最初は、そう。

他の女の子たちと同じ理由だったのよね。

見た目に魅かれてた。そのキレイな姿に。

けど、アイドルのファンなんてみんなそういうものだろうし、女の子って結構ミーハーでしょ？それにこれはきっかけに過ぎないもの。そう思ってた。

だけど夜天くんはそれを極端に嫌っていた。

自分の見た目しか見ていないって。だから地球の女の子は嫌いだった。

そこに、魅かれたのかな。きつと。

僕を見てって、必死に誰かを求めているみたいで、私ならって思った。

そうよ、この気持ちだわ……。

美奈子は大切な気持ちを思い出し、それを包み込むかのようにそっと手を結んだ。



## ？星たちの再会（後書き）

随分前に書いた小説を引つ張り出してきてしまいました。

とても懐かしく、続きを書いてみようかな、せっかくだし投稿してみよう、と今に至ります。

ここまで読んでくださって、ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1844o/>

---

愛の美奈子ものがたり

2010年10月12日00時30分発行